

【番外編】　ドSな先輩に雑魚乳首がバれました

　く喧嘩をしたら「仲直りしよ」と乳首を虐められ、

結局甘々エッチで仲直りするお話く

高嶺さんのお付き合いが始まり、数ヶ月が経った。

当たり前と言ふべきか、なんだかんだと半同棲生活となつた私たちは今やほぼ毎日同じ部屋で過ごしている。

時にイチヤつき、時に喧嘩をし、時に喧嘩に喧嘩を重ねる。そんな日々。

「ごめんってー志帆ー」

そして何の変哲のない本日に至つても、絶賛喧嘩中なのであつた。ちなみに、今回は私が優勢である。

「……………」

「無視すんなー」

事の発端は、私が「絶対出してくださいよ」とお願いした可燃ゴミを、高嶺さんが出してくれなかつたことに始まる。

しょーもないと切り捨てること勿れ、これで三回連続だ。はち切れ

そうなのゴミ袋をどうしてやろうか。冬だからまだいいものの。

怒りと呆れに襲われ、大声で怒る気力もなかった。

しばらくのお付き合いで分かったことがある。高嶺さんは仕事はきっちりするくせに、家のことに關しては適當すぎるのだ。こうしてこの数ヶ月で「そういうところが本当に嫌！」が積み重なった結果、「別に怒ってないです」

私は午前中から今に至るまで、高嶺さんのことをうつすら無視している。

「いや、明らか怒ってんだろ」

ギスギスした空気のままお昼ご飯を作ろうとキッチンに立つたら、高嶺さんもトコトコついてきた。

正直邪魔である。食材を切るたびに「ああ、捨ててない生ゴミがあるのに」という苛立ちがまたやってくるといふのに。

「なー？」

と密かに苛立ったところで、気にせず私の服に手を入れてくるのが高嶺彰という男である。

「ちょ……っ！ 包丁！」

「飯いいから。仲直りしよ」

強い力で包丁を奪われて、シンクにガタンと投げられた。

「またそうやって」と抗議をしようとするけれど、高嶺さんの指は迷いもせず私のブラジャーに向かってくる。

「ん……っ♡」

ブラジャー越しにぴと♡と指を置かれると、自分と異なる体温が乳首を襲い、体がピクツと揺れてしまった。腹が立つ。これじゃあまるでパブロフの犬だ。

「な？」

「な？　じゃな……ッ♡」

すり……っ♡　すり……っ♡

耳元で嫌に低い声を響かせながら、高嶺さんはブラジャー越しに私の乳首を擦った。慣れた手つきの中指が、私を宥めるような速度で左右に動く。たったこれだけでも、私の声を甘くするには十分だった。

高嶺さんの言葉を借りるのなら、私が『雑魚乳首』だからである。

「ん、あ……っ♡」

「許してよ、志帆ちゃん」

高嶺さんの腕を掴んで抵抗してみたけれど、毎度のことながら勝つことはできない。何なら、最近何故か筋トレに精を出している高嶺さんの腕からは逃れようもなかった。

「や……っだあ……ッん♡」

「強情」

高嶺さんは薄ら笑うような声で、そのまま私のブラジャーのカップを下に下ろした。勃起してしまっている乳首に布が擦れて小さく声が漏れる。高嶺さんは今度こそフツと笑った。

「いっぱい触ってやるから」

っん……っ♡　っん……っ♡

揶揄うように勃起した乳首をつつかれて、馬鹿正直に腰が少し揺れてしまう。擦るのでも引っ掻くでもない刺激に、どうしたって「もどかしい」という気持ち湧き出てしまった。

（ま、負けてたまるか……っ♡）

でも、こうやって有耶無耶にされたことももう数知れない。いくら私が雑魚乳首だからって学習くらいはする。ここで「乳首虐めて♡」なんて言ってしまったら、それこそ高嶺さんの思う壺なのだ。

「いらな、いっ♡　から……ッ♡」

「ハッ、こんなに勃たせてんのに説得力ゼロだろ」

くるっ♡　くるっ♡　くるっ♡　くるっ♡

高嶺さんの指が、乳輪に沿ってくるくると回る。テストの採点をするみたいなりズムで回る指は、時折私の勃起乳首を掠めていった。その度に下半身がじんわり熱を持ち、意思を持つかのようにムズムズと動いてしまう。

（が、我慢っ……♡　我慢しなきゃ……っ♡　乳首弄りに負けたらだめっ……♡）

「我慢すんの？」

「っ……♡」

本当に不思議なんだけれど、読心術使えるのかってくらい高嶺さんは私の思考を当ててくることがままある。今日もまんまと当てられて、まんまと黙ってしまった。

「できる？ 我慢」

カリッ♡♡

馬鹿にしたような声と共に、乳首を一回引っ搔かれて「ひあッ♡」と油断した声が出てしまった。密着している高嶺さんが喉を鳴らして笑うと、低い声は骨を伝って子宮に響いてくるようだった。

「かーわい」

カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡

飼い主に頬を寄せる猫みたいな仕草で私にくつついてくる高嶺さんは、笑いながら一定のリズムで乳首を引っ搔いてくる。

カリッ♡カリッ♡に合わせて、腰がピクッ♡ピクッ♡と揺れてしまうのが恥ずかしい。でも、負けるわけにもいかなかった。

「あッ、や♡ んっ……はッ♡ だめッ♡ って、言ってっ♡ るの
にいつ♡」

「泣いて嫌がるならまだしもなあ」

「あんっ♡ あっ♡ やっ♡」

「かわいいー声出しちゃって」

ちゅ、と後ろにからほっぺたにキスをされる。高嶺さんの湿った呼吸に一瞬心臓が高鳴るけれど、その間もカリカリ♡は止まってくれない。私は甘くて短い喘ぎを漏らすしかなかった。

(最悪っ♡ 最悪っ♡ 私がこれ好きって知っててやってるっ♡ 絶対この後高速カリカリ♡くるやつっ♡ 乳首イキさせられるやつっ♡)

高嶺さんのすることなんて大体分かる。だからそう思ったけど、そこに伴う感情が怒りなのか期待なのか私にはもう分からなかった。

「気持ちいい？」

「あッ♡ んうっ……あ♡」

とにかく、気持ちイイのだ。たまらなく気持ちイイ。高圧的で自分本位な高嶺さんの指が、私をイカせるために動いている。その事実が余計に私の性感帯を昂らせた。

（意地悪してきてるくせに、優しい声で聞いてくるのもずるい……っ♡　優しい声なのに、私のイイところちゃんと責めてくるのもずるいし、やっぱりムカつく……っ♡）

気持ちイイことはどうしたって否定できないけど、高嶺さんの意地悪には抵抗したいと思った。

抑えきれない声を漏らしながらも、どうにか首を横に振る。すると、高嶺さんは私の耳元で低く短くこう言った。

「嘘つけ」

きゅむっ♡

勃起してっん♡と上を向く乳首を強く摘まれて、反射的に「あんっ

♡」と甘い声が出た。私の反応が面白かったのか、彼は笑いの混じった声で言う。

「さつきから腰へこへこ♡なってるぞ。意地張んなって」

「う、うるさい♡ 私、怒って……っ♡」

「ごめんってば」

きゅううううう♡♡

私の主張をすかさず遮った高嶺さんは、すかさず乳首を捻り上げた。私の膣内はまるでそれを待ち望んでいたかのように小さくなつて、頭の中も「痛い」より「気持ちイイ♡」に支配されてしまう。

（やだっ♡ やだっ♡ 負けたくないのにっ♡♡）

「っ、強くしないでえっ♡」

「じゃあ、こっち？」

かしッ♡ かしッ♡ かしッ♡ かしッ♡

「こっち？」とは多分「摘まれるより引っ搔かれない？」の意なのだろう。

私の返事も聞かない高嶺さんは、また私の乳首を爪で引っ搔き始めた。昨日丁寧に切られていた彼の爪が、私を傷つけることなくかしかし♡かしかし♡と、快感を重ねていく。

「そうじゃ、ッあ、なくっ♡ てえ……ッ♡」

「いや、無理」

無理ってなんだよとツッコみたくなる前に、高嶺さんの固くなったおちんぼが私のお尻に擦り付けられた。

「ッ……♡」

バキバキに存在を主張してくるそれは、太さと長さで硬さを一瞬で私に理解させてくる。その一瞬で、きゅうッ♡と小さくなってしまいう子宮が大変情けないと思った。

「シよ？」

甘えるような低い声に、子宮の奥が甘く痺れるのも情けない。

（で、でも負けちゃダメだ……っ♡ またエッチに持ち込まれて無かったことにされる……っ♡ が、我慢しなきゃっ……っ♡）

ここで負けてしまったら、もつと情けないことになってしまう。ここまでアンアン言わされてることもしっかり情けないと言うのはさておいて、私は変に強い根性を負けじと見せた。

「い、やだっ♡ あッ♡」

「は？ 無理」

カリカリカリカリカリッ♡♡

だから無理ってなんだよ、というかなんでそっちがキレてんだよというツツコミはやっぱりできなかった。

「あッ♡ やっ、んッ♡ 速くしないでえっ♡」

苛立つような仕草でまた強く私の乳首を引っ掻く高嶺さんに、私の膣は痙攣の間隔を短くしていく。

（あ、やばいっ♡ これやばいやっ♡ 高嶺さんの高速カリカリ♡ しゅき……じゃなくてっ♡♡ このままされたらすぐイっちゃやっ、やばいっ♡ 耐えなきや……っ♡ 耐えなきやっ……♡♡）

「待っ♡ あ♡ んっ♡ 高嶺さっ♡ あっ、ひ♡ ぐう♡」
「イったらベッド行こうな」

「や、あッ♡ もっ♡ カリカリ♡ しないれ……ッ♡ あっ、あッ、
あ♡ だめっ♡」

「期待してただろ？」

「ちがつ、ッあ♡」

「まーた意地張って。高速カリカリ♡してはしくて腰へこへこ♡してたくせに。俺は可愛い彼女の期待には応えるタイプだぞ？」

高嶺さんはそう軽い口調で言うのと、ちゅ♡と軽やかなキスを私の頬に押し付けた。

そうやってふざけながらも、カリカリ♡は絶対に止まってくれない。私の口はもう、ほんとと喘ぎに支配されている。上手く言葉を紡ぐことができないし、呼気さえ嬌声に近かった。

「あ、ば……かあッ♡ ひッ♡ ん、あ……ッああ♡ ひゃうっ♡」

「あーほら、また腰へこへこ♡してきたな？ 乳首カリカリ♡気持ち良すぎてイきそうなんだろ？ 雑魚乳首が可愛い志帆ちゃん、ほーらカリカリ♡ついていっぱいシてやろうな」

「あッ♡ だめっ♡ だめっ♡ だめって、あっ、あッ♡♡」

「我慢すんなよ？ 絶対イった方が楽だって。な、志帆？ 乳首イキ大好きだもんな？ カリカリ♡でアクメするの上手だもんな？」

「や♡♡ あッ♡♡ あっ♡♡ 待って♡♡ 待って♡♡ 高嶺さっ♡♡ ら

めっ♡♡ らめっ♡♡」

「もうちよつとでイけるだろ？ がんばれ、志一帆」

私って高嶺さんの声に弱いんだろうか。

名前を呼ばれた瞬間、脳のコントロールが効かなくなったように絶頂まで一直線になってしまった。「どうして」という混乱が、また私の快感を押し上げていく。

「あつ、待つ、あ、あッ♡♡ 何でっ♡♡ あッ♡♡ っ……く……ッひ……ッん……ッッ♡♡♡」

乳首を虐められたせいで溜まった快感は、ついに子宮で小さく爆発して私の腰をビクビクッ♡♡と大きく揺らした。膝に力が入らずよろけると、咄嗟に高嶺さんが支えてくれる。

「おっと」

ついでにと言わんばかりに、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、と頬や頭に何度もキス

が落とされた。甘ったるいキスだった。

そんな甘ったるい仕草に似合った、甘ったるい声が頬の骨を伝ってやってくる。

「ベッド行こ？」

ずるい、と文句を言えたら良かったんだけど。

反論するパワーを貯める前に唇にキスをされ、舌でちゅる♡と口内を可愛がられてしまう。その流れで服を脱がされながら、私はまんまとベッドへと連れて行かれるのだった。

「んっ……ふぁ……♡ は……ッ♡ わ、私……まだ、怒って……っ♡」

「ん。じゃあ許してくれるまで媚びるわ」

あっという間にベッドに押し倒される。

高嶺さんは私の足首を持ってM字に開脚させると、その脚がベッド

に落とされないように私の股の間に入り込んできた。

そのまま私に覆い被さった彼は、頭になった乳首の一方をちろっ♡ちろっ♡と舐め、一方を中指でくり♡くり♡と弄る。種付けプレスみたいな格好で押し潰された私は逃げ場がなく、高嶺さんの温かい肩を掴みながら高い声を上げた。

「ひうっ♡ あ、ッ♡ んん……ッ♡」

私の乳首をちゅぽっ♡ちゅぽっ♡くにゅ♡くにゅ♡と弄りながら、高嶺さんは私の割れ目に硬くなった怒張を再び擦り付けてくる。腰をゆさゆさ♡と小さく揺らすから、ベッドがギシッ、ギシッと小さく揺れた。

（お、おちんぽまだおつきい♡♡ 体抑えつけて、おまんこにゴリゴリ♡♡って硬さを教えてきてるよお……♡♡ 今から犯すぞって言うてるみたいになっ♡♡♡♡）

「た、高嶺さん……っ♡ それっ……やめ……ッん♡」

「これくらい許せよ、んなエロい声聞いたらそりや勃つわ」

「ひあッ♡」

文句を言う口調の高嶺さんは、腰を横に揺らすようにしてぐりぐり♡とおちんぽを押し付けてくる。圧迫されたクリトリスが痺れて声が出る、高嶺さんは私にキスをした。

「ふ……っ♡ んッ♡ はあ……っ♡」

クチュ♡クチュ♡と舌の音を鳴らしながらも、高嶺さんは腰を揺らし続けた。

クリトリスに当たると、それはきちんとした快感になってしまう。私の腰はくねくねと浅ましく揺れ、息だつて熱くなった。

（そんなにぐりぐり♡押し付けられたら、欲しくなるの分かってやっ
てる……ッ♡）

お互いまだ下着はつけていたけれど、それでもお互いの興奮は同じくらい感じ取れる。

高嶺さんの硬さは言わずがな、私だって誤魔化せないほど濡れていた。

彼の下着には、すでに私の染みがついてしまっているのかもしれない。そんなじゃあ♡とした感覚が何度もあった。

で、DSな彼がそれを見逃すはずもなく。

「すげー濡れてる」

「う、うるさっ……い……ッ♡」

「ごめんて」

（絶対ごめんって思っていない♡ ムカつく♡ ……………ムカつくの……っ♡）

高嶺さんは私にキスをしながらも片方の乳首を未だに弄っていた。

でも、その動きはとても優しい。言い換えれば、足りない。中指で乳頭をすりすり♡とされているだけだ。一方でおちんぼは相変わらずゴリゴリ♡と割れ目を襲ってくる。お腹の奥が、どんどん熱くなっていっていった。

「た、高嶺さん……っ♡」

「んー？」

「も……っ♡ ゴリゴリ♡するの……やめ……ッ♡」

「入れている？」

「……っ♡」

正直ここまできて我慢なんて私も無理だった。

だから、「挿入」は許してもいいかもと思う。

でも、そもそも怒っているゴミ出しのことについては許したくない。だってこの人は全く反省してないし、ここでそれを許してしまっ

たら何も変わらないからだ。

(ゴミ出しのことまだ怒ってるって言って、でもそれでもいいなら入
れていいって言う……っ♡)

おまんこと乳首を可愛がられながらもそう決意するけれど、高嶺さんは私の目論見をそもそも気づいてるみたいだった。

「志帆」

チュツと甘えるみたいなキスと共に、彼は笑う。

「許してくれる？」

「……ッ！」

その笑みは「許してくれるなら入れてあげる」と同義だった。瞬時に理解できてしまったからこそ、瞬間的に怒りが湧く。

(結局こうだ！ いつもこう！ やだ！ほんとにやだ！)

自分が悪いくせに、私をその気にさせて、不利を有利に変えてい

く。高嶺さんが職場で頼りにされるのはこういう交渉術が上手いからだけど、やられる側としてはもう腹が立って仕方がない。

（私ばかり振り回されてる……っ！）

「い、意地悪……！」

気づけばそう言ってたし、気づけば涙が溢れそうになっていた。

よっぽど泣きそうな顔をしていたのだろう。高嶺さんは慌てて私の額に張り付いた髪の毛を払って、そこにキスをした。

「あー泣くな泣くな。泣くのはだめ」

自分が意地悪してきたくせに、こういう時はすぐにフォローしてくれるの何なんだろう。

額にキスをした高嶺さんは、瞼、頬骨、頬、と降りていきながら「焦らしてごめんな？」と言う。

「もっと強い欲しかったもんな？」

(本編に続く)